

博士論文（要約）

論文題目 曾我物語の史的研究

氏名 坂井孝一

## (2) 目次

### 序章 研究史—『曾我物語』と中世社会—

はじめに

- 一 『曾我物語』 諸本
- 二 文学・民俗学の立場からの研究
- 三 歴史学の立場からの研究

おわりに—本書の立場・意図・構成

### 第一部 『曾我物語』と曾我事件

#### 第一章 真名本『曾我物語』の構想と特徴

はじめに

- 一 頼朝の物語と伊東の物語
- 二 年代記的な非年代記
- 三 貧しく不遇な若者の物語
- 四 狩庭の物語
- 五 敵討ちの物語

おわりに

#### 第二章 『吾妻鏡』における曾我事件の記事

—建久四年五月二十八日条の構成と編纂方法—

はじめに

- 一 『吾妻鏡』 建久四年五月二十八日条の位置付けと構成
- 二 記事の性格と編纂方法

おわりに

#### 第三章 『吾妻鏡』の曾我関係記事の原史料

—その性格と史料的价值について—

はじめに

- 一 〈曾我の雨〉から見る原史料
- 二 「将軍」という表現から見る原史料
- 三 「山神」と「曾我記」

おわりに

#### 第四章 建久四年の狩りの前提

はじめに

- 一 建久三年の頼朝政権
- 二 御家人たちの反応
- 三 建久四年前半の情勢

おわりに

## 第五章 『吾妻鏡』の曾我事件の描き方

はじめに

- 一 『吾妻鏡』の曾我事件関係記事
- 二 記事の異同から見た『吾妻鏡』の曾我事件の描き方

おわりに

## 第六章 源頼朝政権における曾我事件

はじめに

- 一 《北条時政黒幕説》と《クーデター説》
- 二 曾我事件前後の記事の意味
- 三 曾我事件の歴史像

おわりに

## 第二部 『曾我物語』の人物論

### 第一章 所領相論から見る『曾我物語』人物論

はじめに

- 一 「真名本」に見る所領相論
- 二 古代末期の伊東の歴史像

おわりに

### 第二章 婚姻政策から見る伊東祐親

はじめに

- 一 伊東祐親の婚姻ネットワーク
- 二 曾我兄弟の母の婚姻

おわりに

### 補論 生年推定—『曾我物語』人物小考

はじめに

- 一 曾我兄弟とその実父母河津三郎・曾我の母
- 二 工藤祐経とその父伊東祐継
- 三 伊東祐親とその長女

おわりに

### 第三章 流人時代の源頼朝

はじめに

- 一 平安末期の伊東氏
- 二 伊東における流人頼朝

おわりに

### 第四章 御家人としての工藤祐経

はじめに

- 一 特異な御家人

二 幕府内の位置付け

おわりに

## 第五章 曾我兄弟の継父曾我祐信

はじめに

一 『吾妻鏡』と「真名本」に見える記事の概観

二 『吾妻鏡』治承四年の曾我祐信

三 「真名本」の曾我祐信

おわりに

## 第六章 曾我兄弟の置かれた歴史的環境

— 管王の管根入山を主な素材として —

はじめに

一 「真名本」が描く管王の管根入山

二 中世の寺入り

三 文治元年の歴史的環境

四 管王の置かれた歴史的環境

おわりに

## 第三部 『曾我物語』の中世的展開

### 第一章 軍記物語の比較文化論的考察

— 『曾我物語』と『ニーベルンゲンの歌』を主な素材として —

はじめに

一 考察の素材

二 戦闘場面の叙述の比較

三 叙述の伝統と文化的背景

おわりに

### 第二章 能「曾我物」の成立

はじめに

一 能「曾我物」概観

二 「真名本」が描く管王元服

三 最初期の「曾我物」の能『元服曾我』

おわりに

あとがき

成稿一覧

索引

本論文は、既に株式会社吉川弘文館から書籍として刊行されているため、インターネットによる全文公表ができない。そこで、書誌事項を記し、本文の公表にかえることとする。

著者名 坂井孝一  
題 名 曾我物語の史的研究  
出版社 株式会社 吉川弘文館  
出版年 2014年（平成26年）  
ISBN978-4-642-02921-6

## 参考文献一覧

### 著書・論文

- 會田実 『「曾我物語」その表象と再生』 笠間書院、二〇〇四年
- 天野文雄 「宮増曾我物語」『芸能史研究』六〇、一九七八年
- 伊海孝充 『切合能の研究』 檜書店、二〇一一年
- 石井進 『中世武士団』『日本の歴史』第一三巻、小学館、一九七四年（二〇〇五年に山川出版社から『石井進の世界② 中世武士団』として再刊）  
『鎌倉武士の実像』 平凡社、一九八七年
- 石川栄作 『ニーベルンゲンの歌—構成と内容—』 郁文堂、一九九二年
- 上原輝男 「曾我の雨再考—雨と瓜と馬と—」『国学院雑誌』一九九三年十一月号
- 上横手雅敬 『鎌倉時代政治史研究』 吉川弘文館、一九九一年
- 大川信子 「真名本曾我物語研究—助通の形象をめぐって—」『常葉国文』一〇、一九八五年  
「真名本『曾我物語』の手法—建久四年敵討ちに至るまで—」『常葉学園短期大学紀要』二九、一九九八年
- 大津雄一 『軍記と王権のイデオロギー』 翰林書房、二〇〇五年
- 岡田清一編 『河越氏の研究』 名著出版、二〇〇三年
- 表きよし 『「曾我物語」の芸能化』『曾我・義経記の世界』 汲古書院、一九九七年
- 角川源義 『語り物文芸の発生』 東京堂、一九七五年  
「妙本寺本曾我物語攷」貴重古典籍叢刊『妙本寺本曾我物語』 角川書店、一九六九年
- 木津隆司 「婚姻をめぐる闘い—ゲルマンの血の伝統とキリスト教—」『中世ヨーロッパ女性誌』 平凡社、一九八六年
- 五味文彦 『「吾妻鏡」の構想』『吾妻鏡の方法』 吉川弘文館、一九九〇年  
『「曾我物語」の世界』(『小田原市史通史編 原始古代中世』、一九九八年（二〇〇六年に、校倉書房刊行の『中世社会史料論』に再録)  
「相模国と三浦氏」(『三浦一族研究』二号、一九九八年  
『日本の時代史8 京・鎌倉の王権』 吉川弘文館、二〇〇三年
- 酒井紀美 「名を籠める」『ことばの文化史〈中世2〉』 平凡社、一九八九年
- 坂井孝一 『曾我物語の史実と虚構』 吉川弘文館、二〇〇〇年  
『物語の舞台を歩く 曾我物語』 山川出版社、二〇〇五年
- 相良守峯 『ドイツ中世叙事詩研究』 郁文堂、一九六〇年
- 佐藤和道 「舞を舞う曾我兄弟—男舞の成立と〈元服曾我〉〈小袖曾我〉〈虎送〉—」『国文学研究』一四九、二〇〇六年
- 佐藤進一 『増訂鎌倉幕府守護制度の研究—諸国守護沿革考証編—』 東京大学出版会、一九七一年  
『日本の中世国家』 岩波書店、一九八三年
- 高橋富雄 『征夷大將軍—もう一つの国家主権—』 中央公論社、一九八七年
- 高橋秀樹 「三浦介の成立と伝説化」『三浦一族研究』七号、二〇〇三年

- 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』東京大学出版会、一九九九年
- 高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局、一九八二年
- 竹本幹夫「能作者宮増の作品と作風（上）」『能楽研究』二六、二〇〇二年
- 谷泰 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界—』平凡社、一九九七年  
『カトリックの文化誌』日本放送出版協会、一九九七年
- 千葉徳爾『たたかひの原像—民俗としての武士道—』平凡社、一九九一年
- 永井路子『つわものの賦』文芸春秋社、一九七八年
- 中澤克昭「狩猟神事と殺生観の展開」『金澤文庫研究』二九七、一九九六年
- 中村生雄『祭祀と供犠—日本人の自然観・動物観—』法蔵館、二〇〇一年
- 野口実 『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年  
『源氏と坂東武士』吉川弘文館、二〇〇七年
- 能勢朝次「貞和時代の曾我物語」『国語国文学研究』第一〇輯、一九四二年
- 菱沼一憲「姻戚関係からみる『曾我物語』」『季刊ぐんしょ』六五、二〇〇四年
- 福田晃 『曾我物語の成立』三弥井書店、二〇〇二年  
「解説」東洋文庫『真名本 曾我物語』2、平凡社、一九八八年
- 三浦周行「曾我兄弟と北条時政」『歴史と人物』東亜堂書房、一九一五年（一九八二年  
に、岩波書店刊行の『日本史の研究新輯二』に再録）
- 村上學 『曾我物語の基礎的研究』風間書房、一九八四年
- 元木泰雄『河内源氏』中央公論社、二〇一一年
- 山添昌子「真名本『曾我物語』の性格及び作者像」『国文』四九、一九七八年  
「真名本『曾我物語』における女性像」『女性と文化』I、一九七九年
- 山中玲子「小袖曾我の相舞」『能の演出 その形成と変容』若草書房、一九九八年
- 山西明 『曾我物語生成論』笠間書院、二〇〇一年
- 山室静 『北欧文学の世界』東海大学出版会、一九六九年
- 山本幸司『穢と大祓』平凡社、一九九二年  
『頼朝の精神史』講談社、一九九八年  
「『曾我物語』と中世家族の実態」『軍記と語り物』四〇、二〇〇四年

#### 史料・文学作品等

- 『吾妻鏡』新訂増補 国史大系、吉川弘文館、一九三二・三三年
- 『鎌倉遺文』第一巻・第二巻、東京堂出版、一九七一・七二年
- 『看聞御記』続群書類従完成会、一九三〇年
- 『玉葉』国書双書刊行会、名著刊行会、一九八八年
- 『愚管抄』日本古典文学大系、岩波書店、一九六七年
- 『山槐記』臨川書店、一九六五年
- 『三長記』臨川書店、一九六五年
- 『明月記』国書刊行会、一九七三年

- 『公卿補任』第一篇、新訂増補 国史大系、吉川弘文館、一九三八年
- 『続群書類従』第五・六輯（系図部）、一九二五年
- 『尊卑分脈』吉川弘文館、一九五七～六一年
- 『曾我物語』日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年
- 『妙本寺本 曾我物語』貴重古典籍叢刊、角川書店、一九六九年
- 『真名本 曾我物語』東洋文庫、平凡社、一九八七・八年
- 『太山寺本 曾我物語』和泉古典叢書、和泉書院、一九九九年
- 『太平記』新編日本古典文学全集、小学館、一九九四～九八年
- 『平家物語』日本古典文学大系、岩波書店、一九六〇年
- 『延慶本 平家物語』本文篇、勉誠出版、一九九〇年
- 『校本 保暦間記』重要古典籍叢刊、和泉書院、一九九九年
- 『謡曲大観』明治書院、一九五三・四年
- 『謡曲集』岩波書店、一九六〇～六三年
- 『謡曲集』新潮社、一九八三～八八年
- 『ドイツ中世英雄物語Ⅱ』（市場泰男訳）、社会思想社、一九九七年
- 『ニーベルンゲンの歌 前編・後編』（相良守峯訳）、岩波書店、一九五五年
- 『ゲルマン北欧の英雄伝説—ヴォルズンガ・サガ—』（菅原邦城訳）、東海大学出版会、一九七九年



## 論文の内容の要旨

論文題目 曾我物語の史的研究

氏名 坂井 孝一

本論文は、建久4年（1193）5月28日深夜、源頼朝の主催する富士の裾野いわゆる富士野の狩りにおいて、曾我十郎祐成・五郎時致の若い兄弟が、実父河津三郎の仇敵、鎌倉幕府の有力御家人工藤左衛門尉祐経を討ち、自らも壮烈な最期を遂げた事件（以下、これを曾我事件と呼ぶ）を中心に、曾我兄弟の生涯を浪漫的に叙述した軍記物語『曾我物語』を歴史学の立場から考察した研究である。

無論、『曾我物語』には文学的脚色・虚構が含まれ、その叙述のみをもって史実を論じることは難しい。しかし、『吾妻鏡』『玉葉』などの歴史編纂物・記録類との丹念な比較を通し、叙述の性格・意義を分析することによって、幕府成立期の歴史の断面を解明することは十分に可能であると考えられる。また、頼朝の流人時代、挙兵に至るまでの過程、古代末期の東国武士団のあり方を探る手がかりが得られるという点でも、『曾我物語』は貴重な史料であると考えられる。

序章では、まず『曾我物語』の現存諸本、とくに鎌倉末期の東国で成立したとされる真名（＝漢字）表記のテキスト「真名本」、南北朝・室町期に京都周辺で成立したとされる漢字仮名交じり表記のテキスト「仮名本」の二系統の現存諸本について説明し、次いで文学・民俗学・歴史学の先行研究を概観した。文学・民俗学では、「曾我語り」「御霊信仰」「唱導」に着目した角川源義と福田晃の「真名本」に関する研究が重要であり、歴史学では三浦周行の《北条時政黒幕説》、石井進の「真名本」を用いた東国武士団の研究、『吾妻鏡』と「真名本」をペアの作品とみる五味文彦の研究が注目すべきであるとした。その他、歴史小説家永井路子の《クーデター説》も示唆に富んだ研究であると評価した。これらの先行研究をふまえて、第一部『曾我物語』と「曾我事件」、第二部『曾我物語』の人物論、第三部『曾我物語』の中世的展開という三部構成で、『曾我物語』に対し多角的に史的研究を行った。

第一部は、「真名本」及び『吾妻鏡』の文学作品・史料としての性格、曾我事件の実像と歴史的意義について解明した。第一章では、「真名本」は頼朝を主人公とするいわば「頼朝物語」と、曾我兄弟の祖父伊東祐親と仇敵工藤祐経との対立を主題とするいわば「伊東物語」を無理やりに結び付けており、ために随所で矛盾が生じていることを指摘した。また、年代記的叙述を取りながら年代が正確でないこと、兄弟を貧しく不遇な若者として描く「貧道の物語」とでも呼ぶべき構想があること、「狩庭の物語」という構想を持ちながら「狩獵者の物語」とまでは言えないこと、祐親を頼朝に対する「不忠の敵人」とみなす構想が色濃く見られ、それが物語に破綻をきたす原因になっていることなどの諸点を指摘した。

第二章では、『吾妻鏡』建久4年5月28日条と「真名本」の叙述を比較検討し、『吾妻鏡』の編纂時には、幕府に伝来した実録的な記録類、「真名本」のもととなったものと同一の原

初的な「曾我」の物語、それとは別の物語である「曾我記」などの原史料があり、編纂者は記録類を基本に置きつつ各種の物語の内容や表現を取捨選択して組み合わせ、史書としての体裁を整えるために特筆部分を追記したとの結論を得た。

第三章では、『吾妻鏡』に見える〈曾我の雨〉の叙述、「将軍」・「山神」という語に着目し、編纂者が記録類に次いで重視したのは「真名本」の原史料の「曾我」の物語ではなく、「狩獵」を業とし、武芸を職能とする武士の感覚・信仰を伝える「曾我記」であったとした。

第四章では、建久3・4年、絶頂期を迎えた征夷大將軍の頼朝が、永福寺の落慶供養や一連の狩りの催行により、〈都の王権〉に比肩すべき〈東国の王権〉の主宰者であることを表明しようとしたこと、その方向性に違和感・不満を持つ御家人たちがいたこと、武士団内部や武士団相互に対立の火種が醸成されていたこと、建久4年前半には相模・武蔵でそうした確執が表面化し、伊豆では工藤祐経に対する北条時政の敵意が生まれていたことを指摘した。

第五章では、『吾妻鏡』建久4年の曾我関係の記事と「真名本」の叙述との異同に着目し、事件当日・翌日の五月廿八日条・廿九日条に関して、《何らかの事情》により『吾妻鏡』の編纂時には原史料とすべき記録類が失われていた可能性があるという仮説を提示した。そして、編纂物の『吾妻鏡』と文学作品の「真名本」のみによる曾我事件の解明は難しいことから、《何らかの事情》について考察する必要があることを指摘した。

第六章では、まず《北条時政黒幕説》・《クーデター説》の検討から、『吾妻鏡』と「真名本」の描く曾我事件とは異なる歴史像が描き得ることを導き出し、次いで『吾妻鏡』に見える曾我事件前後の記事の検討から、《何らかの事情》とは頼朝・時政・八田知家らを中心とした体制引き締め陰謀と、大庭景義・岡崎義実ら体制に不満を持つ御家人たちの富士野での〈暴発〉を意図的に隠蔽し、情報を操作したことにあると指摘した。曾我事件後、頼朝は源氏一門を肅清することにより政権基盤を安定させ、上洛して〈東国の王権〉の実現に向けて突き進む。その契機となったのが曾我事件であったと結論した。

第二部では「真名本」を平安末・鎌倉初期の重要史料と位置づけ、『吾妻鏡』の記事と合せて当該時期の東国社会の歴史像、武士たちの人物像を明らかにした。第一章では、「真名本」巻1の叙述から、伊東祐親・工藤祐経の所領相論が久須美荘の中心である伊東荘の領有権に限られること、祐親が祐経を退けた後、河津三郎の遺児一万・管王兄弟を母とともに曾我に移したのは、自身が体験した相論を教訓とした策であったことなどを明らかにした。

第二章では、「真名本」巻1・5の叙述から、祐親の婚姻ネットワークが伊東氏・三浦氏・狩野氏などの軍事的・政治的思惑や、平氏政権の動向、源氏と伊豆国との根深い結びつき、所領相続をめぐる伊東氏の内部事情、祐親が展開する海上・陸上交通を通じた相模・武蔵の武士団との連携といった要素が絡み合って形成されたものであったことを解明した。なお、考察の過程で曾我の母・工藤祐経の生年を推定したが、同様の方法を用いて祐親やその長女、祐経とその父祐経の生年などを推定したのが補論である。

第三章では、頼朝の21年間の流人時代のうち16年にも及ぶ伊東での生活にもっと注

目すべきことを提言し、「真名本」巻1～3・5の叙述から、頼朝配流時の伊東氏の当主が祐親ではなく祐経の父祐継であったこと、祐継死後の祐親による所領経営のためのネットワーク形成が、北条に移ってからの頼朝の挙兵に大きな影響を与えたことを導き出した。

第四章では、『吾妻鏡』を主な史料として、曾我兄弟の仇敵工藤祐経が都的な教養・経験・人脈によって都志向の強い頼朝に重用された〈特異な御家人〉であったこと、その一方で、北条時政ら挙兵当初より頼朝に従って戦ってきた武芸・武勇を尊ぶ東国武士たちは反発感情を抱いていたことを明らかにし、曾我事件の背景として注意すべきであると指摘した。

第五章では、「真名本」での叙述が少ないが故に研究対象とされてこなかった曾我兄弟の継父曾我祐信に着目し、「真名本」巻1・4・10の叙述や、『吾妻鏡』治承4年(1180)・元暦元年(1184)・文治元年(1185)の記事から、「真名本」では祐信の人物像が、似た境遇にある曾我の母の形象の中に解消され、祐信の言動も母の言動であったかのように叙述されていること、『吾妻鏡』を用いて御家人としての祐信の行動を探ると、「真名本」巻4における兄弟の年齢と年号のズレという謎も解けることなどの諸点を明らかにした。

第六章では、前章での祐信に対する考察をふまえ、兄一万の元服、弟管王の管根入山、兄弟の異母兄祐綱の初の御家人役勤仕が、文治元年10月・11月という近接した時期に集中して見られるのは、狭小な所領曾我荘しか持たない祐信の家の経済事情や、祐信から祐綱への世代交代という事情によるものであったことを明らかにした。

第三部では、『曾我物語』の軍記物語としての側面や、能の「曾我物」という『曾我物語』の発展の様相について考察した。第一章では、ヨーロッパ中世の英雄叙事詩と異なり、日本中世の軍記物語は戦闘場面での「血の叙述」がほとんどないという特徴を、「真名本」の〈十番切り〉の叙述から抽出し、その文化的背景として、キリスト教・「供儀」思想と対照的な、神祇信仰・仏教に基づいた「食べる文化」「供養の文化」の存在を指摘した。

第二章では、「曾我物」の作品を概観することによって、能と「真名本」との近似性や、都の享受者が受け入れやすい身近なテーマが選ばれていることなどを指摘し、最初期の「曾我物」の能『元服曾我』に着目した。そして、「真名本」とは違う兄の手による路次での元服という能独自の異常な設定は、北条時政をあえて烏帽子親にしなかったことによるものであり、それは作者に比定される宮増の創作であった可能性が高いと結論した。

以上、『曾我物語』とくに「真名本」と曾我事件に対し、三部にわたって歴史的な考察を加えた。そもそも曾我事件は歴史上の事件であり、『曾我物語』は長く日本人の心を捉えてきた作品である。単に文学的・民俗学的に研究するだけでなく、史的に研究することによって、いっそう多くのことを現代の我々に教えてくれる。『曾我物語』は中世初頭の歴史を解明するための重要な史料であり、日本人にとっての貴重な財産であると考えられる。